Japan Epilepsy Society

C−29 てんかん患者の性格傾向
—脳波のlaterality及び罹病期間との関連について—

増渕　洋，小野常夫，八島祐子，石下恭子，高橋志雄，管るみ子，熊代　永
福島医大　神経精神科

〈はじめに〉

てんかん患者の性格傾向は，病因，初発年齢，罹病期間，発作型，異常脳波などとの関係で論じられている。しかし，病巣のlatralityから論じられた報告は未だ見られていない。そこで，今回我々は以上の罹病期間や発作型等の関与の他に，脳波のlatralityからの関与を国際分類の部分てんかんについて検討したので報告する。

〈対象と方法〉

対象は当科のてんかん外来へ通院中の部分てんかん患者45名である。その性格傾向を評価するために，従来から用いられているてんかん性格を9項目（内向，外向，易怒，几帳面，執着，気分易変，活発，不活発，生意気）に分け，それらの重度のもののみをその性格傾向ありとした。

〈結果〉

①異常脳波局在が左半球の者18名，右の者18名，について性格傾向ありとした症例の頻度を見ると，左右いずれも執着(左44，右50%)，気分易変(左，右とも33%)が多く，左右で差異はみられなかった。しかしWAISテストで見ると「動作性IQ」では差異は認められなかったが，「言語性IQ」で左右に差が認められた。

②異常脳波の出現が狭い部位に限局した例では，執着などの性格傾向が多く見られ(50%)，またこれらの発作型には自動症が多かった。

③罹病期間と執着などの性格傾向の関係を見ると，その性格傾向の出現頻度は10年以内群で24%，11〜20年群で56%，21〜30年群で80%であり罹病期間との相関性がうかがえた。

〈まとめ〉

以上から，てんかん患者の執着，気分易変などの性格傾向は，脳波のlaterality（言語性IQ），発作型，罹病期間の長さなどと関係があることを示唆した。

C−30 ヒステリー発作を合併したてんかんの2女児例

宮本信也　工藤英昭　鴨下重彦
（自治医大小児科）

ヒステリー発作とてんかん発作の鑑別は既に歴史的問題であるが、診断のまぎらわしい例は少なくなく、また両者を合併する場合もあると考えられる。最近このような2例を経験したので症例を提示し、両者の関連について考察する。

症例1は14才女児。5才8ケ月より、口の自動運動を伴う意識消失発作を、1年に1回位の割で認め抗けいれん剤を投与されていた。11才以後、腹痛、頭痛、幼児語、徘徊、失声、失立、出まかせ応答、失神等を呈し、3回の入退院をくり返しつつ、面接療法にて軽快した。抗けいれん剤はすべて中止した。脳波上、3〜4 c/sの不規則な棘徐波結合を、汎発性両側同期性、やや前頭部優位に認めたが、11才時の失神発作中には棘徐波結合は認めなかつた。患児は、多忙な農家の末子として生まれ、幼小児期より祖母に面倒をみられていたが、小学1年時、祖母が脳出血で倒れて以来、孤独な生活を送つていた。11才までの経過は小発作であり、それ以後は、満たされない基本的愛情欲求不満の上につくられた依存的性格を背景に、年長になるにつれ、それなりの役割を要求されたことを契機として発症したヒステリーと思われた。

症例2は15才女児。1〜3才時、頻回の熱性けいれんがあり、3〜4才よりめまい、吐吐が出現。以後、体のふらつき、構音障害、複視、霧視、耳鳴、難聴、心臓痛、失神等、多彩な症状が動揺しつつ加わつてきた。脳波上、4c/s の不規則な棘徐波結合を汎発性両側同期性、やや前頭部優位に認めた。CAG、CTを含む諸検査では異常なかつた。面接療法、施設入所により、めまいの訴え以外は消失した。抗けいれん剤は、PB以外中止、PBも減量された。てんかん類似の突発性反復性疾患はあつたと思われるが、多彩な症状は、発作ゆえに毎日父親から気違いと罵倒され、耐えられない家庭環境からの逃避を目ざしたヒステリー症状と思われた。

NII-Electronic Library Service